

報告タイトル

リー・シェンロン政権の 20 年：シンガポール人民行動党の権威主義体制はどう変容したか？

20 Years of the Lee Hsien Loong Administration in Singapore: How has the authoritarian regime changed?

氏名(所属)

田村慶子 (北九州市立大学)

TAMURA-Tsujii Keiko (The University of Kitakyushu)

* 学術振興会に登録された英語氏名

要旨(800 字程度)

2004 年 8 月、「シンガポール人の政治参加を奨励し、開かれたインクルーシブな社会を創る」と高らかに宣言して、リー・シェンロンはシンガポール第 3 代首相に就任、2024 年 5 月に退任した。本報告では彼の 20 年間の統治を 2011 年総選挙と 2020 年総選挙を分析軸として振り返り、与党人民行動党 (PAP) の強固な権威主義体制がどう変容したのか、あるいは変容しなかったのかを考察する。

彼の統治下では、父のリー・クアンユー初代首相に見られたような、批判勢力や野党政治家に対しての露骨な排除はなくなった。しかしながら、言論や表現の自由への抑圧は継続あるいは強化されている。2010 年以降、未成年を含むブロガーが次々とシェンロンから告訴され、2019 年にはオンライン上に掲載された情報に対して政府が訂正命令を行使でき、命令に従わない場合は罰金および禁固刑が科せられる「フェイクニュース情報操作対策法」が制定された。この法は 2020 年総選挙までに 55 回も発令され、その約 3 分の 2 が独立系オンラインメディアに、約 4 分の 1 が野党政治家や社会活動家の言論に対してであり、まさに「反対勢力を沈黙させるための法」となっている。

さらに、第 4 代首相選出プロセスが進むにつれて、PAP を内部分裂させるような可能性のある人物への圧力と排除（それが実のきょうだいであっても）が行われた。これらは新首相と PAP 一党支配を守るための措置だったと考えても不思議ではない。

シェンロンの 20 年間で、PAP 権威主義統治の本質は変わらなかったと言えるだろう。ただ、次期総選挙は 2025 年 11 月までに実施することになっているため、新首相は、代替政策を提案するなどして存在感を増す野党労働者党 (WP) の動向と国民の反応をみながら、これまでのやり方と政策の微調整をしなければならないだろう。

新首相の課題はあまりにも大きい。